

女川町まちづくり推進協議会 公開フォーラム

新しい女川の海図



- 日時 平成 31 年3月7日(木)午後6時～8時30分
- 会場 女川町まちなか交流館 ホール
- 参加者:約 90 名

- 1)住民みなさんと歩んできた復興まちづくり **復興推進課**
- 2)基調講演:女川の復興まちづくりの特徴 **平野勝也氏**
- 3)意見交換:復興の8年 これまでとこれから

これまで ①つくる編: 震災から立ち上がり、まちの未来を描く
 ②つかう編: 意見を出し合ったまちがえられる今、感じていること
 これから ③つかい倒す編: もっと暮らしやすいまち、楽しいまち、好きなまちのために

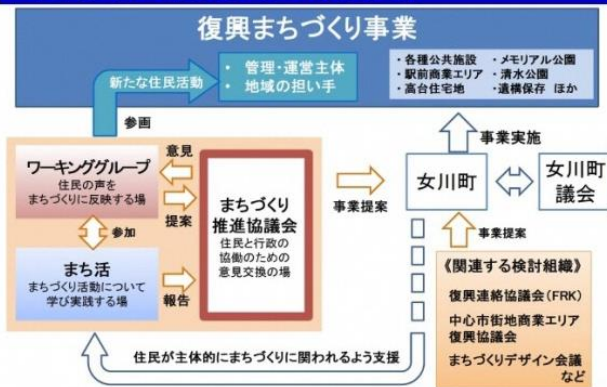
- 4)総括 **まちづくり推進協議会委員**
- 5)おわりに **女川町長 須田善明**

8年間の復興計画期間の協働のまちづくりを担ってきた、まちづくり推進協議会の最終回。子育て世代の女性を始め、会場全体を巻き込んだ熱い意見が交わされました。もっというまちにする方法を「みんなで一緒に考えよう!」という町長の呼びかけもあり、会場全体に一体感が生まれ、新たな協働まちづくりへの船出を予感させる会となりました。



1. 住民みなさんと歩んできた復興まちづくり

住民参加の復興まちづくり体制



住民意見反映の流れ



2. 基調講演：女川の復興まちづくりの特徴

～まちは時間の蓄積。だから複雑でおもしろい～

デザイン会議では、人の流れを生み出す『生活軸』と、自然との関係性を次世代に継承する『海への眺望軸』をまちのデザインに反映させるため、スピードを重視しつつ、しつこいとも思える質の追及がなされました。女川駅と海をつなぐシンボル空間のデザインでは、軸線をくずすことで、レンガみちが主役にならないよう工夫しています。また、水産加工団地や自立再建店舗では、自主的・主体的な景観づくりが進められ、まちの価値を高めることにつながっています。

「口説ける水辺」など、町民から明確な意思と主体性が示されるため、外部専門家として、その意思を形にするお手伝いをしているだけです。官民の垣根も官の縦割りも超え、最先端の公民連携で復興が進められたことが、女川町の特徴です。

平野 勝也氏
東北大学災害科学国際研究所
所准教授、女川町復興まち
づくりデザイン会議委員長、
女川町発展計画審議会会長



3. 意見交換：復興の8年 これまでとこれから

<町民参加者>

- ◇ 阿部喜英さん 《H24-27 まちづくりワーキンググループ参加、公民連携のまちづくりを推進する若手リーダー》
- ◇ 須田めぐみさん 《H25-27 まちづくりワーキンググループ参加、女川町社会福祉協議会》
- ◇ 八巻英成さん 《H25-26 まちづくりワーキンググループ参加、尾浦保福寺住職、坊主喫茶などで地域活動》
- ◇ 木村繁子さん 《住民活動グループ「あ～らだてのこみちの会」代表世話役》
- ◇ 岩部莉奈さん 《特定非営利活動法人 アスヘノキボウ職員、昨年福岡県から女川町に移住》

<コメンテーター>

- ◇ 関根梢さん 《河北新報社 石巻総局/女川町の復興を追った連載企画「復幸の設計図」担当記者》
- ◇ 須田善明 《女川町長》

<コーディネーター>

- ◇ 平野勝也氏

① つくる編：震災から立ち上がり、まちの未来を描く

◇ **新しい街に向けた「口説ける水辺」**

震災前、海辺は仕事の間でした。震災後の街に向けて新しさが欲しいという議論になり、ワーキングメンバーからキャッチコピーを出して行かないとまとまらないだろうと声が上がったんです。(阿部さん)

◇ **中心部の高台移転**

以前の町の中心だったところは住宅地がなくなり全部高台に移るといったことだったので、ワーキングメンバーで動線がきちんと計画されないと、人の行き来が無くなってしまおうとお伝えしました。(須田さん)

◇ **施設をコンパクトに配置して人の流れをつくる**

駅前の商業エリアをどうしていくのか検討する中、岩手県紫波町オガールの取り組みを知り、毎年勉強会に参加しました。身の丈に合った商業施設のつくり方、運営や経営手法、公共施設の配置などを学び、復幸まちづくり女川合同会社、女川みらい創造㈱の設立につながりました。(阿部さん)

◇ **ワーキンググループで出したアイデアが実現**

まちなか交流館の検討をしていた時、ホールを結婚式ができる場所に、ガラス張りに、とテンションが上がって、言いたい放題の楽しい議論をしたことを覚えています。(須田さん)

➡ 2017 春、町の復興に関わった2組のカップルがレンガみちで挙式

◇ **離半島部の高台移転**

移転先の土地の確保などに難航したようですが、住民主体で進められました。(八巻)
デザイン会議では微修正しかできなかったが、制度を賢く活かした土地造成がされている。(平野氏)

◇ **明確な意見を持ってまちづくりした女川**

例えば、災害遺構の残し方について、「追悼の場、伝承の場だけではなく、頑張って復興してきた自分たちを誇れる場にしたい」と。前向きに捉えて考えて行くところが凄いです。(平野氏)

② つかう編： 意見を出し合ったまちがつられる今、感じていること

◇ 普通の公園がコミュニティガーデンに

新しく造成された住宅地での再建にあたり、近所の公園にみんなで共同花壇をつくって緑好きな仲間と一緒に手入れを楽しんでいます。花壇で生育したハーブを使った料理にも取り組み、保健センターのハーブ料理教室にも声掛けいただきました。手作り雑貨が上手な仲間も多く、作品をお地蔵さまの市に出展しています。活動をきっかけに新しいつながりが広がっています。(木村さん)

◇ 裏通りの良さを活かしたお地蔵さまの市

自分の店に面した通りを、地域の子どもやお年寄りの居場所、楽しみが生み出される通りにしようと『お地蔵さまの市』を開いています。手作りが好きなお年寄りが外に出るきっかけにもなっています。レンガみちをメイン通り、1本北側の自分の店のある通りを裏通りと呼ばれ、くやしい思いもあったが、裏通りには裏通りの良さがあると思い立って始めました。(会場からのご意見)

◇ 自分ごとでまちづくりを語れるスゴい町

女川の復興をひも解く連載記事を担当するにあたり、始めに阿部喜英さんにインタビューした際、なぜ新聞屋の店主がここまで芯を食った当事者の話ができるのだろうと驚き、他の人に話を聞いてもやはり自分たちがまちづくりをしている当事者という意識がありました。この町はただ事ではない、と感じ「復幸の設計図」を執筆しました。(関根さん)

◇ 教科書で学んだまちづくりが現実にある町

地域創生を学ぶ学生ですが、女川は教科書で出てきたまちづくりが本当に進む素敵なまちでワクワクします。在学中に移住を決めたのですが、理由は、人が魅力的な事。こんなにかっこいい大人達に出会ったことはありません。(岩部さん)

◇ 同年代との縁で次々に巻き込まれる不思議

女川は人に魅力があるだけでなく、何か引き寄せられるものがあります。まちなかだけでなく離半島部のみなさんも頑張っています。色々な意見もアイデアも出されます。まちの使い方はまだまだ拡がると思っています。(会場からのご意見)



③ つかい倒す編： もっと暮らしやすいまち、楽しいまち、好きなまちにするために



大きな流れをつくりだす戦略

◇ 町民もお客様も多くの人を迎えられるまちへ

シーパルピア各店舗に固定ファンがついている。客層は仙台圏のほか北関東からも多い。今後は海岸公園を目的とした家族連れをレンガみちへどう繋いでいくかを確立していきたい。(阿部さん)



◇ 小さな取り組みと大きな流れの戦略は両輪 共に必要

地域レベルでは木村さんの活動のように、小さな取り組みの積み重ねが大切。一方で、阿部さんが考える流れの大きなまちづくりも、どちらも重要。地域でのコトおこしは地元のみなさんが主役。成功例が横に広く展開するよう、環境づくり、きっかけづくりをしていきたい。(須田町長)

活動人口を増やしつつ、町民の日常利用が促進することで相乗効果が生まれる。地元スーパーが完成すると人の動きも変わる。これから完成する空間で、色々な世代・立場の人がいきいき暮らせる場づくりが必要(平野氏)

暮らしの中の小さな取り組み



◇ まちの持続可能性を考えるなら住民利用も

まちの持続可能性を考えるなら、地元住民の利用をもっと高めることも重要。未成年者や、町内で仕事をしていない方、退職された方などがもう少し利用しやすいまちづくりが必要ではないかと思う。(会場からのご意見)

◇ 目的と繋がりができると人は集まってくる

奥清水まなびの森で子育て世代のお母さん有志で遊び場づくりを企画しています。やってみて気付いたのは、横の繋がりが声掛けで友達が友達を呼び人が集まることです。イベントがあっても、地元の親子がまちなかに出て来ない現状があるが、目的と声掛けがあれば人は集まるはず。あまり家から出て来ない高齢者に子どもの面倒を見てもらうような縦の繋がりも大切です。(会場からのご意見)



◇ それぞれの区が輝くと町も輝く

計 190 世帯の災害公営住宅各階に班長がいて 2 ヶ月毎に班長が交代し、ふれあいカフェの運営を始め多くの住民が行事に関わっている。地区の高齢化率は 50%以上だが、皆で協力して健全なコミュニティが育まれている。女川町に住んで本当に良かった。(会場からのご意見)



◇ 答えはすぐ出なくてもいい

今日からみんなで考えよう

観光客向けの町になってしまったという意見をよく聞くが、地元向けのお店もたくさんある。震災前の町と今の町で、何が違うのか、「目的」という言葉にヒントがあるはず。何か足りないのなら、それをみんなで埋めて行くなり、生むなりしていかなければならない。答えはすぐ出なくても、みんなで一緒に考えていこう。(須田町長)

◇ 生活に景色をつくれれば歩くのが楽しくなるはず

震災前は、鷲神から駅前に行くのに商店街や町並みがあり歩くのが全く苦でなく、途中で店に立ち寄ったり、動線に景色があった。高台からの坂道に花壇をつくるなど楽しめる工夫が必要。(須田さん)

◇ 以前は様々なコミュニティで支えられていた

行政区の自治コミュニティだけでなく自由に選べる色々なコミュニティがあり、地域を見守っていた。ゆぼつぼ前の駅前のスケボーを認めてもらっているが、子どもが居心地の良い環境をつくりたい。(須田さん)

◇ まちに長時間滞在できるしぐみに期待

知り合いを女川に連れて来ると、見る場所がコンパクトで、あまり長い時間連れ回せない面がある。海岸公園にエリアが広がると、楽しみ方のパターンが増え、昼も夜も食事をしてくれるかも。(関根さん)

◇ フューチャーセンターカマスを利用してほしい

何をやっている場所なのかご存知でない方もいます。趣味を活かした教室やお茶っこなどで自由に使える無料のスペースがあります。どうしたら立ち寄りやすくなるか、ぜひご意見ください。(岩部さん)

◇ もっと地域の公園を楽しみたい

みんなで色々なアイデアを出し合って、楽しみを見つけていますが、問題(鹿による被害など)が起こることもあります。少しずつ解決して、活動を続け、他の地区にも広がってほしいです。(木村さん)

◇ 「自分たちの女川」にするには時間が必要

各地区の集会場を活用し、坊主喫茶を開催している。人集めは口コミが一番。「都」はできたので、住民の気持ちがまちに向かえば「住めば都」になる。今はまだ使い方を模索する段階。(八巻さん)

◇ まちなかにつかい倒すためのしなやかさを

町民が使いつらいまちという意見があるのは確かだが、「おらほのまち」となるためにつかい倒す仕掛けを考えていく必要がある。例えば、空店舗や空室を町民が出入りできる縁側のような空間にしては。(会場からのご意見)

◇ 女性目線のまちづくりで優しいまちに

女川もせつかく女という文字が付くので、女性サミットというのをやってみたい。例えば、着物を着てまちを歩くと、お店で 50 円引き、お年寄りの遠足会など、町民を優遇した取り組みをしてみたい。(会場からのご意見)



4. 総括：まちづくり推進協議会 委員の皆さんより

➤ 女川の今からが本当のスタート

町民の皆さんで平日もまちがにぎわうよう、盆踊りなど企画しており、今後もアイデアを出していきたい。まちの器はできたのでこれからみんなで課題を解決！（女川小学校PTA 会長 鈴木行雄委員）

➤ まちづくりの本格化あたって子どもたちの力を

高校生、中学生、小学生世代が、10年20年経って大人になった時、女川に戻って来たい、住み続けたいと思える良いまちにしていきたい。

（女川中学校PTA会長 多澤秀和委員）

➤ 自分で出来ることをすることが大事

被災された方に気を使って一歩引いていた人もいるが、そろそろ皆さん出て来るのではないかと。人任せでなく、皆で同じ方向を向いていこう！

（女川町社会福祉協議会長 的場登美子委員）

➤ 保健医療が充実した健康なまちづくりを

集合住宅に閉じこもっている人が多いと感じる。どんな方も、病院に来やすい、役場に来やすい、まちに出やすい、そんなまちづくりが出来たらいい！

（女川町地域医療センター長 齋藤充委員）

➤ 意見を出し実現したまち、皆で住みやすく

高齢化率は県内トップクラスだが、女川は子育てしやすい町。若いお母さんの活躍の姿がもっと見えるようなまちに、情報を伝わりやすくしていこう！

（女川町婦人会長 木村佳代子委員）

➤ どの地区でも人が集まれる場が必要

このようなまちが出来ると夢にも思っていなかった。ワーキングにいた若い皆さんが本当に一生懸命頑張った結果!! 清水公園に健康遊具を！

（女川町区長会長 齋藤俊美委員）

➤ 住宅地と商業地が交差しないメリットを活かす

まちは変化し続けないと持続出来ないという面があり、また変化は不安を伴うもの。けれども、高台住宅地は観光客とクロスせず安全安心の場所！

（女川町観光協会会長 阿部喜英副会長）

➤ 素晴らしい人たちが集まって素晴らしいまちができた

こんなに盛り上がる会議は、久しぶりというより初めて。人柄もいい、景色もいい、食べるものもうまい、全てが良い町。もっと魅力あるまちにしよう！

（女川魚市場買受人協同組合理事長

高橋孝信会長）



5. おわりに： 女川町長 須田善明



多くの皆さまのご理解とお力添えでここまで来ることができました

ワーキンググループを始めたのは、開かれた場で色々な意見を持っている人が顔を出して直接出し合えるところが必要だと思ったからです。皆さんと議論をしないと自分自身が30年後に後悔するという思いもありました。まちという器が出来たが、何か足りない、それを皆さんと埋めていく必要があります。穴が空いていたらそれを埋める、尖った部分があればもっと尖らせる、そうすると住む皆さんにとっても訪れてくれる方にとっても、もっといいまちが作れると思います。

重要なのは、「誰かがやってくれる」ではなく、「みんなでやっていく」という空気感

まちづくり推進協議会は一旦終わりになりますが、みんなで答えを探す新たな場の必要性を改めて感じました。今日ご参加の皆さんと一緒に、「私たちの女川」にするため、新たな協働の場をみんなで創っていきましょう!! ここからが本当のスタートです。